

の取り組みの態度や心情面についても評価が行われる必要がある。理想的に言えば、単位時間毎に的確におさえられているのがよいだろうが、現実にはなかなかそうはいかない。

例えば1時間の授業を例にとれば、技能的な比較的目的でとらえやすいものは評価できる。態度、心情面はとらえにくいばかりか、その時間その時間で変りやすく、評価に時間をかける意味が少ない。

そこで、学習評価の基本的かまえとして次のように考えている。

- ① 知識、技能にかかわるものは、単位時間の評価を大切にしてい。右図は、高等部の木工の場合の例示である。
- ② 態度、心情にかかわるものは、単元を通すなど長い時間をかけて実施する。
- ③ 学期末毎に、経験領域の獲得拡大の状態を、通知表の評価観点(段階別教育内容表と対応させてある)により総合評価する。

以上の3つが基本的なかまえであるが、教師は自分の取り組みを常に反省し、軌道修正のための評価につとめるのは当然であろう。しかし、評価はあくまで指導のためにあるのだから、複雑な評価を組み立てて、指導に支障がくるようなことは決してしてはならないと思う。

5 問題点と今後の課題

以上、表現化に視点をあてた指導法の構想について述べた。この構想は、表現化に視点をあてた指導の基本路線を示したに過ぎず、囲碁で言えば定石に過ぎない。この構想は、一人ひとりの教師が、自分の持ち味を生かして、どう運用するかが重要なことなのである。

次に述べる各学部の実践事例は、表現化に視点をあてた指導の具体例であるが、研究体制の中で討議を重ねた理想とはほど遠い感がある。例えば、教科は道具としながら教科にとらわれていたり、生活化を目ざす立場や表現の視点がボケていたりで問題が多い。学校体制そのものに、表現化に視点をあてた検討が更に進められる必要もある。例えば、学級担任とか教科担任とかは、みな生活担任の立場から授業を見直す必要がある。日課表の検討も必要であろう。このように今後の課題は多いが、その緒についた実践について、項をあらためて述べる。

	個人目標	段階別	評価
表現化	・簡単な指示を聞いて、正しく作業できる。	G 1 0(3)	
	・製品の数を正しく数え、班員に報告できる。	A 9(4)	
	・簡単な反省文が日誌に書ける。	H 1 0(4)	
職業	・ロープを正しく固定できる。	B 7(4)	
	・製品を整理・整とんできる。	N	
業	・不良品を選別し、班員にその個所が指摘できる。	M 7(4)	
	・指導者の補助を得て、クギを打つことができる。	H 1(4)	
	・きめられた仕事を最後までし、無断で仕事を離れたりしない。	N 4, 6(4)	
業	・使った材料や道具の始末ができる。	N 3(3)	
※ 備 考			